

Radar QFD の概要と目的

Quality Function Deployment (QFD、品質機能展開)は、市場ニーズ(要求される品質・機能)と技術シーズ(実現する技術要素)を結びつける製品開発手法ですが、従来は専門知識や多大な工数が必要でした ([140120250331504055.pdf](#)) ([技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。VALUENEX の提供する Radar QFD は、特許ビッグデータ解析ツール「VALUENEX Radar」のアルゴリズムと生成 AI を活用し、この QFD プロセスを自動化・効率化する SaaS 型の解析ソリューションです ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。具体的には、関連する特許文献から市場の課題(ニーズ)と技術要素(シーズ)を抽出・整理し、「課題表」(ニーズ一覧)、「技術表」(シーズ一覧)、「品質表」(ニーズ×シーズのマトリクス)の 3 つの主要な情報を自動生成します ([140120250331504055.pdf](#)) ([Radar QFD | 技術とニーズの可視化で商品開発を支援 - VALUENEX 株式会社](#))。開発担当者はこれらをもとに短時間で QFD を実行でき、製品の品質向上や開発スピード向上、競争力強化・リスク低減につなげることができます ([140120250331504055.pdf](#))。

上記の「課題表」「技術表」「品質表」は、QFD で用いられる「品質表(ハウスオブクオリティ)」を構成する要素です。それぞれの構造と意義を以下にまとめます。

成果物	内容(構成要素)	意義・用途
課題表	市場やユーザ視点の課題リスト。大項目・中項目・小項目の階層構造で整理。 (2024_RadarQFD のご紹介.pdf) (ニーズ一覧) 課題項目には、特許文献から抽出された具体的な**「解決すべき課題」**のタイトルと説明、関連特許番号などが付与されます。	開発すべき市場ニーズの網羅的把握に役立つ。社内外の情報から抽出された客観的な課題一覧により、見落としの防止や重要課題の発見を支援 (2024_RadarQFD のご紹介.pdf) (FMEA における潜在的故障モード抽出補完など)。
技術表	技術要素リスト。こちらも大項目・中項目・小項目の階層構造で、**「必要な技術要素や解決手段」**がタイトルと説明付きで整理されます(課題表と対になる構成)。	製品機能を実現するための技術シーズを網羅的に把握できる。自社だけでなく競合含めた技術動向を含むリストのため、代替技術の検討や技術戦略立案に有用 (2024_RadarQFD のご紹介.pdf)。新分野進出時に自社の技術

成果物

内容(構成要素)

意義・用途

品質表
(課題×技術マトリクス)
縦軸に課題表の大項目、横軸に技術表の大項目を配置した二元マトリクス。[\(2024_RadarQFDのご紹介.pdf\)](#)各セルには該当する課題と技術の組み合わせに関するスコアが表示されます。このスコアはその組み合わせに該当する特許件数を表します。[\(2024_RadarQFDのご紹介.pdf\)](#)。課題・技術項目は展開して中項目・小項目レベルまで対応づけ可能です。[\(2024_RadarQFDのご紹介.pdf\)](#)。

知見が不足する場合でも、関連技術要素を体系的に得られます〔技術開発向けの調査を根底から変える！
Radar QFD の概要と応用例の紹介

ニーズとシーズの関連性を定量的に可視化したもの。スコアが高い(関連特許が多い)組み合わせは重視されてきた領域、スコアが低い組み合わせは技術的ホワイトスペース(未開拓領域)を示唆します。これにより重要課題-技術のペアを優先順位づけしたり、競合が手薄な領域を発見したりできます。[\(2024_RadarQFDのご紹介.pdf\)](#)
[\(2024_RadarQFDのご紹介.pdf\)](#)。

[\(Radar QFD | 技術とニーズの可視化で商品開発を支援 - VALUENEX 株式会社\)](#) Radar-QFD が生成する「品質表」の一例(ドローン×通信領域の課題-技術マトリクス)。縦軸に市場課題、横軸に技術要素が大項目・中項目レベルで示され、各セルの数字は対応する特許件数(スコア)を表す。色付けされた領域(緑は上位 25%、赤は下位 25% [\(2024_RadarQFDのご紹介.pdf\)](#))により、特に注目度の高い組み合わせや低い組み合わせが一目で分かる。

Radar QFD の目的は、このようにして得られた課題表・技術表・品質表を開発現場で直接役立つ形で提供し、市場ニーズと技術シーズのマッピングによる戦略立案を支援することにあります [\(140120250331504055.pdf\)](#)。AI が生成した情報は開発者にとって理解しやすい一般的な技術用語で構造化されており、そのまま技術ロードマップ策定や事業戦略立案に応用可能な実用的なデータです [\(2024_RadarQFDのご紹介.pdf\)](#) [\(140120250331504055.pdf\)](#)。これにより、従来は属人的な知見に頼っていた QFD 分析を客観データに基づき短期間で実施できるようになり、企業の R&D 戦略の精度とスピードを高めることが期待されています [\(140120250331504055.pdf\)](#)。

技術的な特長

Radar QFD には、特許解析と生成 AI 技術を組み合わせた独自の仕組みによって、従来にはない様々な特長があります。その主なポイントを以下にまとめます。

- **VALUENEX Radar との連携:** VALUENEX Radar は膨大な特許文書をクラスター可視化(俯瞰図)するツールですが、Radar QFD はその結果と互換性を持つよう設計されています([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。Radar で特定技術テーマの特許集合を絞り込んだ後、Radar QFD で詳細解析することで、**俯瞰(マクロ)から詳細(ミクロ)へのスムーズな情報連携**が可能です([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。もちろん、あらかじめ数百～数千件程度に対象を絞れていれば Radar QFD 単独でも利用可能であり(母集団が 2000 件程度以内なら単独利用可能との記載あり)、大量の特許を扱う場合でも Radar との併用で多角的な解析ができます([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。
- **生成 AI による自動分類・要約:** 特許明細書は技術情報の宝庫ですが、専門的で冗長な記述が多い傾向にあります。Radar QFD では **GPT 等の生成 AI が特許文書を読み込み、発明が解決しようとする課題と技術手段を自動抽出・分類**します([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。これにより、課題表・技術表に記載される項目の**具体性・明確さが飛躍的に向上**し、開発者が直感的に理解できる表現になります([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。例えば専門用語や固有名詞も、一般的な技術用語に置き換えつつ整理されるため、特許原文を読むことに慣れていない設計者でも内容を把握しやすくなります([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。
- **課題・技術の階層的構造化:** 出力される課題表・技術表は大項目・中項目・小項目の階層構造を持ち、関連する項目同士がカテゴリ化されています([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。この構造化データにより**マクロからミクロへの視点移動が容易**になっています([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。まず大局的な重要領域を把握し、必要に応じて中項目・小項目へドリルダウンして詳細を確認する、といった使い方が可能です。エンジニアは自分の関心分野の項目を辿って関連特許にアクセスすることもでき、まるで**技術用語の辞書のように活用**できるとされています([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。
- **ニーズとシーズの関連性スコアリング:** Radar QFD 最大の特徴は、課題×技術の 2 次元マトリクス(品質表)に**スコア(数値)**を付与している点です([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。このスコアは各課題項目と技術項目の交点に該当する特許件数であり、言い換えれば「その技術でその課題を解決しようとした例」がどれだけ存在するかを示す指標です([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。スコアリングには VALUENEX 独自のアルゴリズムが使われており、

関係が強い組み合わせほど高スコアとなります。これにより、**数値に基づく定量的な分析**が可能となり、例えばスコアの高い領域から重点開発テーマを決めたり、逆にスコアの低い組み合わせから新たな研究機会を探すことができます ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。

- **可視化と分析機能:** 出力された品質表は、視覚的にも重要領域が把握しやすいよう工夫されています。例えば Radar QFD のレポートでは、品質表のセルをスコアの大小に応じて色分けすることで一目でヒートマップ状に強弱が分かるようになっています(上位 25%を緑、下位 25%を赤等 ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#)))。これにより、どの課題-技術の組み合わせが特に頻繁に研究・開発されているか、またどれが手薄かを**直感的に可視化**できます ([140120250331504055.pdf](#))。さらに、このマトリクスデータを加工することで、競合比較や時系列変化分析など様々な派生分析も可能です ([140120250331504055.pdf](#))。例えば後述の活用事例のように、複数企業の品質表を比較したり、年代別に品質表を作成して技術トレンドの推移を分析するといった応用も容易です。
- **優先度評価と戦略策定支援:** 各技術要素・課題の重要度がスコアで定量化されているため、開発上の優先課題を客観的に選定するのに役立ちます ([140120250331504055.pdf](#))。開発チームは高スコアの領域に注目することで「最もニーズの高い機能は何か」「競合が集中的に投資している技術はどれか」といった洞察を得られ、意思決定を支援します ([140120250331504055.pdf](#))。逆に低スコア領域は将来の白地(ホワイトスペース)として**新規事業のチャンス**を示唆するため、戦略立案にも有用です。Radar QFD で得られた知見はそのまま技術ロードマップや研究テーマの選定に反映でき、**製品開発の精度を高める武器**となります ([140120250331504055.pdf](#))。

以上のように、Radar QFD は VALUENEX Radar によるビッグデータ俯瞰解析と生成 AI による文章解析を組み合わせることで、**「速さ」「具体性」「構造化」「定量性」**を実現したツールと言えます。他の社内外ツールとの親和性も高く、汎用的なデータ出力(表やグラフ)によって Excel 等での加工や共有も容易でしょう。

主な活用事例

Radar QFD で得られる「課題表・技術表・品質表」は汎用性が高く、製品開発や R&D 戦略上のさまざまな場面で活用できます。資料で挙げられている主な実践例を以下に紹介します。

- **FMEA の補完(リスク分析の網羅性向上):** FMEA(故障モード影響解析)では、製品のあらゆる潜在不具合モードを洗い出す必要がありますが、抜け漏れなくリストアップするには経験と労力が要ります。Radar QFD は客観的な特許情報から課題(リスク要因)を自動抽出できるため、社内データだけでは見落としがちな問題もリストに含めることができます ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。実際の活用効果として、Radar QFD で生成した課題表を参照することで「重要課題の判断補助」や「抜け漏れ防止」が可能となり、従来は準備作業に取られていた工数を対策立案など創造的活動に振り向けられるようになります ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。これは上流設計段階での品質確保(未然防止)に貢献するものです。
- **パラメータ設計の補完(要因検討の効率化):** ロバスト設計(パラメータ設計)では、製品の特性ばらつきを抑えるための最適な要因と水準を決定する必要があります。従来、このための実験計画はノウハウ頼みで工数も多大でした ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。Radar QFD を使えば、**関連技術の要素パラメータを網羅的に洗い出し**、品質表で各パラメータの重要度(影響度合い)をスコアで可視化できます ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。例えば技術表から主要な制御因子・誤差因子候補を抽出し、その組み合わせ頻度を見ることで**キーパラメータの当たりを付けることが可能です** ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。その結果、設計者ごとの勘に頼らず均質な要因選定ができ、また社外知見も含めて広い視野で実験計画を立案できるようになります ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。
- **競合技術の比較分析:** Radar QFD は競合企業との技術比較にも有効です ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。例えば自社(A 社)と主要な競合他社(B 社,C 社)の特許を対象に、それぞれ Radar QFD 解析を行い品質表を作成すれば、課題・技術への取り組みの差異が浮き彫りになります ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。実際のケースでは、「自社が優位と認識している技術領域」の特許群で解析すると自社が把握済みの課題・技術が多く抽出され、**自社が注力する領域に対して競合がどのようなアプローチをしているか**を知ることができました ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。逆に「自社が劣位または未対応の技術領域」で解析すると、自社が十分把握できていない課題・技術が多く洗い出され、**今後強化すべき改善・成長ポイントの洞察**が得られました ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。このように Radar QFD による競合比較分析では、各社の注力課題・技術を定量比較することで、SWOT 分析的に自社の強み・弱み領域を客観評価できます ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。さらに品質表のセルを比較し、競合にはあるが自社に欠ける組み合わせ(ホワイト

スペース)を発見して新たな開発テーマとする、といった活用も可能です
([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#)) ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。

- **新規事業開拓における業界動向把握:** 新規事業の立ち上げや異業種参入の検討では、対象業界全体の技術課題動向を把握する必要があります。Radar QFD は特定分野に関する技術マトリクスを時系列で作成することで、技術トレンドの変遷や未解決課題を明らかにできます ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#)) ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。例えばある消費財メーカーが「緑化工法」に着目して業界分析を行った事例では、関連する特許を業界全体から収集し、Radar QFD で年代別(2003-2009 年、2010-2016 年、2017-2023 年の 3 期間)に品質表を作成しました ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。その結果、「緑化工法」に関する特許出願件数は年々減少していること、初期には課題だった「平滑面への緑化」は解消傾向にあり、近年では**「種子の発芽・生育」が残存課題となっていること、また技術面では「緑化用ネットの構造」が一貫して最重要視されていることが判明しました ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。これにより、参入を検討する領域で既に解決された課題と未解決の課題**、注目すべきコア技術が明確になり、事業戦略立案に役立つ洞察を得ています ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。
- **自社技術の異分野転用先探索:** 自社が保有するコア技術を全く別の分野に応用できないか検討する場合にも Radar QFD は力を発揮します。ある事例では**「電子写真(プリンタ)の帯電技術」**を他分野で活かす可能性を探るため、「ゲーム機器」分野を対象に Radar QFD 解析を行いました ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。具体的には、帯電技術に関する特許群を解析して技術表を作成し、一方でゲーム機器分野の課題表を作成して、それらを組み合わせた品質表を生成しています ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。その結果、帯電部材に用いられる高分子材料技術がウェアラブル機器の基材や接着剤に転用可能であることが示唆されました ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。実際に関連する特許として「移動体用シリコンゴム接着剤組成物」([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))や「ウェアラブルデバイス用半導体装置に関する硬化性樹脂組成物」([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))といった出願が見つかり、プリンタ分野の材料技術がモバイル機器の課題解決に応用された例が確認できました。これにより、自社技術の新たな用途開拓のヒントを得ることができます。

以上のように、Radar QFD は製品開発プロセスの様々な局面(信頼性設計、品質工学、競合分析、新規事業企画、技術マーケティング等)で実践例が報告されています。共通して言えるメリットは、客観的データに基づいて課題と解決策を網羅的に洗

い出し、可視化できる点です。これにより従来手探りだった部分が体系立てて進められるようになり、各種検討業務の精度と効率が向上します。

導入プロセスと納品物

Radar QFD の導入にあたっては、ユーザー企業のニーズに応じて柔軟なプロセスが用意されています。提供形態は、大きく分けてクラウドサービス型(SaaS 型)と受託サービス型の 2 種類があります ([Radar QFD | 技術とニーズの可視化で商品開発を支援 - VALUENEX 株式会社](#))。クラウドサービス型ではユーザー自身が Web 上のツールを操作して品質表を生成できます。一方、受託型では VALUENEX のコンサルタントがヒアリングに基づき解析を代行し、成果物を納品します ([Radar QFD | 技術とニーズの可視化で商品開発を支援 - VALUENEX 株式会社](#))。以下は受託型サービスの一般的な流れです。

1. **事前ヒアリングとテーマ設定:** まず VALUENEX 担当者がユーザー企業から解析の目的や対象分野のヒアリングを行います。ここで求めるアウトプットのイメージをすり合わせ、解析テーマや特許の母集団を設定します ([2024 RadarQFD のご紹介.pdf](#))。ユーザー側で既に検討対象の特許リスト(母集団)をお持ちの場合は提供いただき、それをそのまま利用することも可能です ([2024 RadarQFD のご紹介.pdf](#))。特許母集団が未確定の場合でも、VALUENEX Radar を用いて関連特許を網羅的に収集・選定する支援が得られます(一般には特許件数で 1,000 件以内程度に絞ることが推奨されています ([2024 RadarQFD のご紹介.pdf](#)))。
2. **Radar QFD 解析の実施:** ヒアリングで決定した特許データセットに対し、VALUENEX 社内で Radar QFD 解析を行います。([2024 RadarQFD のご紹介.pdf](#))このステップでは、VALUENEX Radar による俯瞰解析と生成 AI による内容解析を組み合わせ、課題表・技術表・品質表を作成します ([2024 RadarQFD のご紹介.pdf](#))。必要に応じて日英など多言語の特許にも対応し(※直近のアップデートで外国語特許の解析や技術用途軸での分析、発明者情報の抽出などにも対応 ([技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#)))、ユーザーの関心に沿った形で分析を深掘りします。解析期間は通常発注から約 1~2 週間程度で、緊急度やデータ量によって調整されます ([2024 RadarQFD のご紹介.pdf](#))。
3. **納品と説明:** 解析完了後、成果物一式がユーザーに納品されます。基本的な納品物には**「課題表」「技術表」「品質表」**および品質表の各セルスコアの

詳細データ(「品質表スコア LOG 情報」)が含まれます ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。これらは Excel やスライド形式で提供され、社内共有やレポート作成にそのまま活用できるようになっています。納品時には、必要に応じて VALUENEX から成果の読み解き方や分析結果の解説が行われ、ユーザー企業内での展開を支援します。

納品物の内容は、ユーザーの目的に応じてカスタマイズ可能です。例えば「自社の製品開発にそのまま QFD を適用したい」という場合には、課題表・技術表の大項目がそれぞれ 5～15 項目程度で構成され、全体像を網羅しつつ重要項目に絞り込んだ品質表(スコア付き)が提供されます ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。一方「複数の技術テーマを横比較したい」という場合には、主要 5 項目程度に絞った品質表をテーマごとに複数作成し、比較分析できる形で納品することも可能です ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。さらに「特定業界や技術テーマの動向分析にも活用したい」というニーズには、上記の品質表に加えて Radar 俯瞰図データや主要プレイヤー・年次動向をまとめた簡易レポートも併せて提供するという対応も行っています ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。このように、ユーザーの用途や予算に応じた柔軟な提案が可能であるとされています ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。

総じて、Radar QFD の導入プロセスは比較的短期間(1～2 週間程度)で完了し、専門コンサルタントのサポートによりアウトプットの品質も担保されます。クラウドサービス型を利用する場合でも、初回は VALUENEX の支援のもと分析条件の設定や結果の解釈を行い、次回以降は社内メンバーで自走するといった使い方も想定されます。導入のハードルは高くなく、まずはパイロットプロジェクトで試してみる企業も多いと考えられます。

類似ツールとの比較・差別化ポイント

Radar QFD の特徴をより鮮明にするために、他の QFD 支援手法や特許分析ツールとの比較を整理します。

- **従来の QFD 手法との比較:** 従来の QFD では、顧客ニーズ一覧の作成から技術要件への落とし込み、マトリクス評価まで人手で行う必要があり、多くの専門知識と工数が要求されました ([技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。特に日本企業では QFD は品質設計の定番ながら「実践が難しい」という声もありました ([技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要](#))。

[と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。Radar QFD はそこを自動化・省力化する点で画期的です ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。AI による課題・技術抽出により短時間で解析結果を得られるため、お客様の作業時間を大幅短縮でき ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))、忙しい開発現場でも QFD を実行に移しやすくなります。要するに、今まで数週間～数ヶ月かかった分析が、Radar QFD を使えば数日～1 週間程度で完了し、スピード面で圧倒的な優位があります。

- **他社の QFD 支援ツールとの比較:** 他にも QFD を支援するソフトウェア (例えば Excel テンプレートや専門パッケージ) は存在しますが、これらは基本的に社内データやユーザー調査結果の手入力を前提としており、外部データを自動収集・分析するものではありません。Radar QFD は全世界の特許ビッグデータを活用する点でユニークであり、社外の知見を取り込んだ QFD を自動で実施できる点が差別化ポイントです。例えば、通常の QFD ツールでは自社顧客の声に基づくニーズしか扱えませんが、Radar QFD なら競合他社の動向や周辺技術の課題まで含めてニーズを抽出できます ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。そのため、より網羅的・客観的な製品企画が可能になります。
- **特許分析ツールとの比較:** 特許情報を活用したツールとしては、パテントマップやトレンド分析を行う製品 (他社の IP ランドスケープツール等) もあります。しかし、それらは特許間の類似度クラスタリングや出願件数推移の可視化といったマクロ分析が中心で、開発現場がすぐ使える形で技術課題・要素を提示するものではないことが多いです。Radar QFD は、特許データをエンジニアにとって理解しやすい単語で整理し直し、課題と技術を対応付けてくれる点で一線を画します ([2024_RadarQFD のご紹介.pdf](#))。つまり、「特許分析の結果を開発部門向けに使える粒度にまとめ上げる」ことに成功しており ([技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))、特許情報と現場ニーズの橋渡しツールとして独自のポジションを築いています ([140120250331504055.pdf](#))。多くのユーザー企業から「Radar QFD の品質表は知財部が現場に提供する情報の粒度としてちょうど良い」との評価を得ているのも、その証左と言えます ([技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。
- **TRIZ 等の問題解決手法との比較:** 製品開発における課題解決策検討では、TRIZ (発明的問題解決理論) のような手法も使われます。TRIZ は過去の特許知見を汎化した発明原理を提供しますが、Radar QFD は個別の技術領域に特化して具体的な課題と解決策の組を洗い出す点で補完的です。TRIZ が汎用的アイデア発想を助けるのに対し、Radar QFD は特定分野における網羅的

な課題・技術リストを提示するので、より実践的・具体的な検討に向いています。両者を組み合わせれば、Radar QFD で抽出した重要課題に対して TRIZ の発明原理を適用し、新奇な解決策を創出するといった活用も考えられます（※この点は資料上直接の言及はありませんが、両手法の性質から見た一般論です）。

まとめると、Radar QFD は**「自動化されたエクスターナルデータ活用型 QFD 支援ツール」という点でユニークです。他のツールでは得られない具体性・可読性・網羅性を備えたアウトプット**を短時間で生成し（[140120250331504055.pdf](#)）、それを基にした多角的な分析まで可能にしているところが大きな強みです。

対象ユーザーや想定業界

Radar QFD は主に**製造業の研究開発・商品開発部門**をターゲットに想定しています。QFD 自体がもともと製造業（自動車、電機、精密機器など）で広く活用されてきた経緯があり（[140120250331504055.pdf](#)）、その現代版支援ツールとして位置付けられます。特に、自社の技術だけでなく**業界全体の知見を開発に取り入れたい**と考える企業に適しています。想定される導入企業の業種としては、自動車・自動車部品、電機・電子機器、機械、化学、医療機器、消費財メーカーなど、活発な製品開発と特許出願を行っている分野が挙げられます。実際、事例に登場する**カメラメーカー（光学）（[2024 RadarQFD のご紹介.pdf](#)）やプリンタメーカー（事務機）（[2024 RadarQFD のご紹介.pdf](#)）、消費財メーカー（[2024 RadarQFD のご紹介.pdf](#)）**など、幅広い業界で適用可能性が示されています。

企業規模としては、ある程度の R&D 投資を行っている中堅～大企業が中心となるでしょう。特許情報を扱う知財部門と現場開発部門の双方を有し、両者の連携を強化したいというニーズにマッチします（[技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#)）。実際、VALUENEX からは以下のような層に Radar QFD を**「おすすめ」**しています（[技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#)）。

- **新技術の調査をしたい商品企画・開発担当者**：例えば新製品に採用する技術候補について外部の最新動向を含めて把握したい場合、Radar QFD で関連特許から課題・技術を洗い出すことで、効率良く情報収集できます（[技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 |](#)

[VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。社内に蓄積が少ない新規分野であっても、有望技術や解決すべき課題の全体像を掴むのに役立ちます ([技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。

- **未知の分野に参入する事業企画担当者:** 自社ノウハウが乏しい分野でも、Radar QFD の客観データに基づき詳細状況を把握可能です ([技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。業界動向や競合状況を定量データで示せるため、説得力のある新規事業計画立案を支援します。特に既存事業からの転用技術を探したいケース(先述の技術転用事例など)で有用です。
- **研究開発部門と連携する知財部門の担当者:** Radar QFD のアウトプットは、知財部門が社内展開する技術情報として最適との評価があります ([技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。そのため、知財・特許情報を現場に提供する役割の方々にも適しています ([技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。特許調査結果を単なるリストではなく、課題表・技術表という形で提供できれば、現場とのコミュニケーションギャップを埋められるでしょう。
- **技術人材のスキル分析をしたい方:** 会社内部や協力企業の技術者がどのような課題・技術経験を持っているかを Radar QFD で分析する、といった使い方も提案されています ([技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。発明者情報の分析機能(アップデートで対応) ([技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#)) を用いれば、組織内外の技術知見マップを作成することも可能で、人材育成やオープンイノベーション戦略にも活かれます。
- **VALUENEX Radar ユーザー:** 既に VALUENEX Radar を導入済みで「特定クラスター(数百件規模)の内容を深掘りしたい」ユーザーにも推奨されています ([技術開発向けの調査を根底から変える！Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。Radar で俯瞰した後、Radar QFD で詳細を構造化することで、分析に一貫性と深みを持たせることができます。

以上から、Radar QFD は製品企画～開発～知財までの幅広い層を対象としており、「社内外の膨大な技術情報を開発に役立てたい」というニーズを持つ企業であれば業種・規模を問わず有用でしょう。特に自社技術戦略の再検討や、競争環境が激しく迅速な開発判断が求められる分野では、導入メリットが大きいと考えられます。

評判や展望

Radar QFD は 2024 年からサービス提供が開始され、2025 年 4 月 1 日には正式に新ツールとしてリリース発表が行われました ([140120250331504055.pdf](#))。この発表では、Radar QFD が AI で QFD を支援し製品開発を加速するツールであることが強調され、製造業の開発現場における活用が期待されています ([140120250331504055.pdf](#))。公式プレスリリースによれば、Radar QFD は**「開発現場にすぐに活用できる具体性・可読性・網羅性」を備えた実用的な情報を提供する**とされ、既にユーザー企業から「現場に提供する情報の粒度としてちょうど良い」といった好意的なフィードバックを得ているとのことです ([140120250331504055.pdf](#)) ([技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。特許情報の専門家である知財部門から見ても、Radar QFD のアウトプットは現場目線で有用との評価が多く、導入企業からは概ね高い満足度を得ているようです。

また、VALUENEX 社は Radar QFD の普及に力を入れており、各種セミナーやウェビナーで情報発信を行っています。2024 年には 1 月および 5 月に Radar QFD 関連のセミナーが開催され、最新事例の紹介やアップデート内容の説明が行われました ([技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。直近では 2024 年 12 月にも「Radar QFD の概要と応用例紹介」ウェビナーが開催され、外国語特許対応や発明者分析といった新機能の紹介も行われています ([技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#)) ([技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))。公式リリース後の 2025 年 4 月 22 日には、Radar QFD アプリケーションの紹介ウェビナー(オンライン)が開催され、定員 100 名が募集されるなど関心の高さがうかがえます ([140120250331504055.pdf](#))。このようなイベントを通じてユーザー企業の声を集め、機能改良やユースケース開拓に活かしているようです。

機能面での展望としては、既に言及したように多言語対応(海外特許の解析)や技術用途軸での分類、発明者(技術者)分析などが進められており ([技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#))、Radar QFD の適用範囲はさらに広がる見込みです。これによりグローバル企業の R&D にも対応し、社内外の技術資産・人材を最大限に活用できるプラットフォームへと発展していくでしょう。また、現在は VALUENEX のコンサルティングサービス色が強い提供形態ですが、クラウドアプリケーションとしてユーザー自身がイ

ンタラクティブに使えるよう機能拡充が図られています（[技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#)）。実際、Radar QFD の Web アプリではユーザーが自分で条件設定し品質表を出力可能で、今後は UI の改善やリアルタイム分析機能の追加など**使い勝手の向上**が計画されています（2024 年 12 月セミナーでの説明より（[技術開発向けの調査を根底から変える！ Radar QFD の概要と応用例の紹介 | VALUENEX 株式会社のプレスリリース](#)））。将来的には、開発エンジニアが日常的に利用する**「AI アシスタント」的な存在**として、設計初期段階から Radar QFD で外部知見を取り入れることが当たり前になる可能性もあります。

Radar QFD は提供開始から日が浅いものの、その革新的**コンセプトと実践での有用性**により注目を集めています。VALUENEX 社自体も「研究開発の現場にイノベーションをもたらすツール」と位置付けており、今後も最新事例の公開や他社ツールとの差別化をアピールしていくと考えられます。製造業における DX（デジタルトランスフォーメーション）や AI 活用の一環として、Radar QFD のようなソリューションはますます重要性を増すでしょう。ユーザー企業の評判も、「短時間でここまで網羅的な課題・技術整理ができるのは驚き」「社内の議論の出発点として非常に役立つ」といった声が期待され、実際にそうした成果が蓄積されていけば、標準的な開発プロセスの一部に組み込まれていく展望も十分にあります。

最後に、Radar QFD の登場は**「AI 時代の QFD」とも言える変革をもたらしています。従来、人間の経験と勘に頼っていた部分をデータ駆動型に置き換えることで、より客観的で抜け漏れのない開発戦略策定が可能になります。製品開発の未来像として、Radar QFD が示すような知財 × AI × エンジニアリングの融合**がスタンダードになっていくことが予想されます（[140120250331504055.pdf](#)）。今後の Radar QFD の展開にも注目です。

参考文献・資料: 本回答では、VALUENEX 社の公開資料（プレスリリース【1】【2】、製品紹介 PDF【9】【16】【20】【22】【25】【29】【31】、公式 Web ページ【42】等）およびセミナー情報【33】【37】を参照しています。各所に示した【+】付き番号は、それら出典からの引用箇所を示しています。Radar QFD に関する詳細は公式サイト【42】や VALUENEX 社イベントページ等もご参照ください。